

食道潰瘍を伴った腸型 Behçet 病の 1 症例

宮崎医科大学第 1 外科

指宿 一彦 久本 寛 香月 武人

A CASE OF INTESTINAL BEHÇET DISEASE WITH ESOPHAGEAL ULCER

Kazuhiko IBUSUKI, Hiroshi HISAMOTO and Taketo KATSUKI

First Department of Surgery, Miyazaki Medical College

索引用語：Behçet 病，食道潰瘍

はじめに

Behçet 病(以下 B 病)は、特徴ある潰瘍を回盲部に形成することが多いが、食道病変を合併することまれである。今回われわれは、食道にも潰瘍を合併した腸型 B 病の 1 例を経験したので報告する。

症 例

患者：19歳，男性。

既往歴，家族歴：特記すべきことなし。

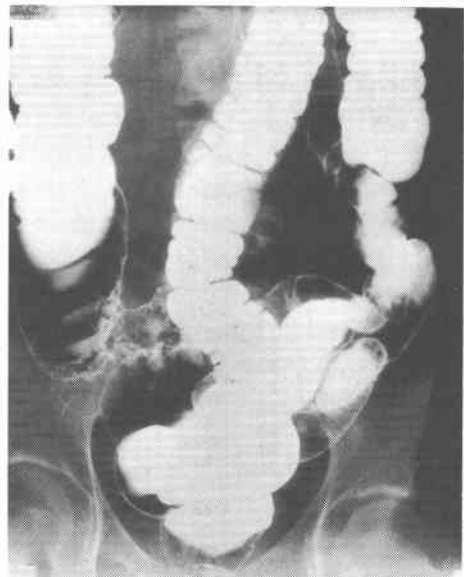
主訴：右下腹部痛，血便。

現病歴：生来健康。昭和59年5月上旬より右下腹部痛が持続，7カ月間にわたる保存的療法にもかかわらず改善せず，諸検査でも異常が指摘されなかった。昭和59年12月宮崎医科大学第1内科で注腸透視を受け回盲部潰瘍を指摘された。大腸ファイバースコープによる生検で悪性所見や特定の炎症所見は得られなかったが，抗酸菌が採取された。国立宮崎東病院で抗結核剤の投与を4カ月間受け，潰瘍は縮小した。しかし昭和60年7月30日再度右下腹部痛，血便が出現したため入院した。

入院時現症：体格小，結膜に軽度貧血あり。顔面に痤瘡様皮疹多発。心肺に異常なし。腹部平坦，右下腹部に軽い圧痛をみとめた。

血液生化学検査：末梢血正常，黄疸なし。肝・腎機能正常。血沈17mm/h，CRP 1+，LE test (-)，抗核抗体 (-)，抗 DNA 抗体 (-)，thyroid test (-)，microsome test (-)，CEA 0.5ng/ml (<2.5ng/ml)，IgG 1,620mg/dl (770~1,550mg/dl)，IgA 322mg/dl (76~376mg/dl)，IgM 118mg/dl (47~217mg/dl)，便潜血 (-)，便結核菌培養 (-)。内視鏡時採取

図 1 注腸透視：回盲部に潰瘍形成をみとめる。



した抗酸菌のナイアシンテスト陰性。顔面皮疹の細菌検査陰性。

検査所見：注腸透視で回盲部に巨大な潰瘍形成があり，周堤は不整形のもり上がりを見せる(図 1)。上部消化管透視で，胸部食道にも潰瘍をみとめ(図 2a, b)，内視鏡検査で潰瘍とその対側に炎症性病変をみとめる(図 3a, b)。生検で単純性潰瘍と診断された(図 4)。昭和60年8月20日手術。

手術所見：回盲部に大きな腫瘍がありその口側約50cmにわたる回腸にも，腸間膜と反対側に漿膜のひきつれが多発性にみとめられた。回盲部切除施行。

切除標本所見：回盲部に，打ち抜いたような円形の深い潰瘍，回腸に3カ所の潰瘍瘢痕をみとめた(図 5)。

図 2a 食道透視：中部食道ニッジェをみとめる。

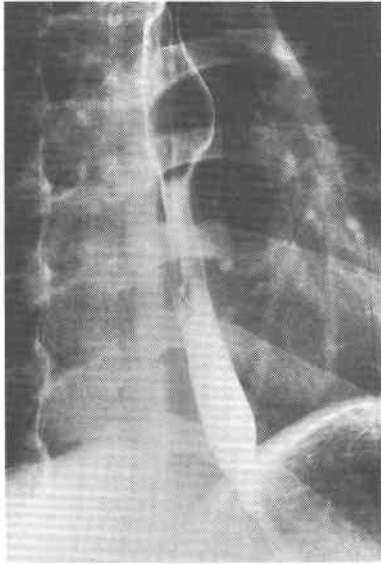


図 2b シェーマ

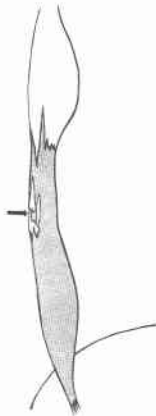


図 3a 食道内視鏡所見：浅い潰瘍形成と顆粒状の変化をみとめる。

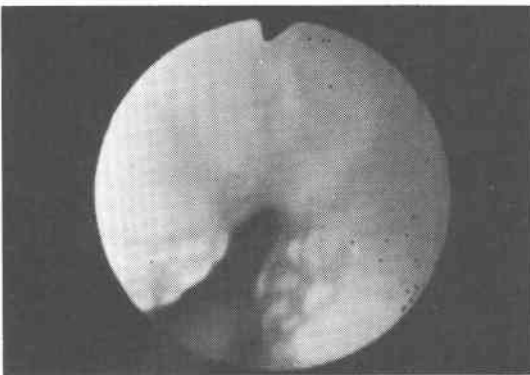


図 3b シェーマ、黴びらん面

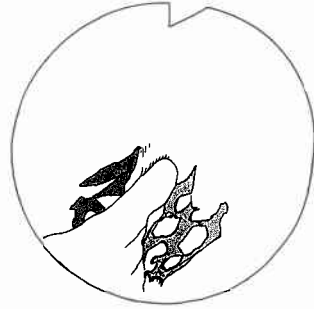


図 4 食道生検組織像：慢性炎症細胞浸潤と新生肉芽をみとめる。

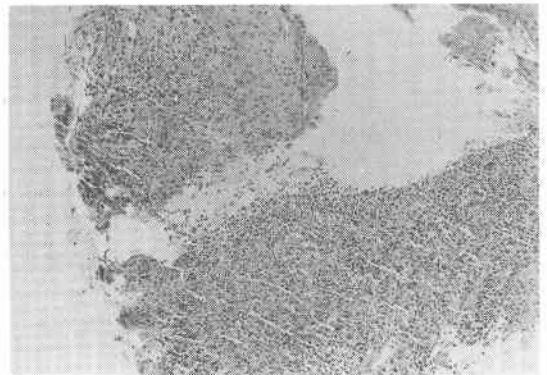
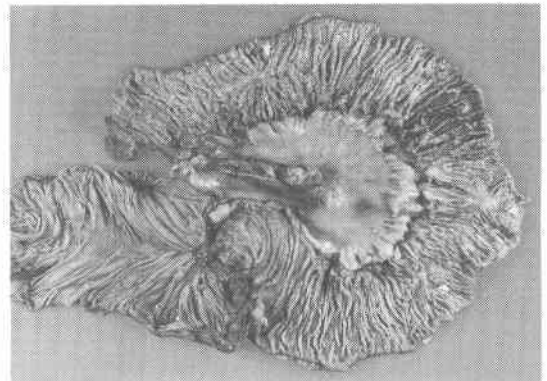


図 5 摘出標本：回盲部の深い円形潰瘍の他、回腸に多発性の潰瘍痕をみとめる。

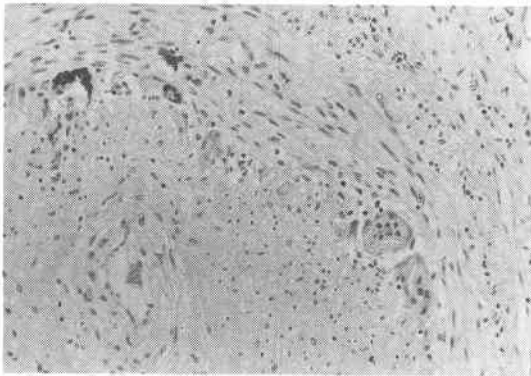


組織学的には、強いリンパ球浸潤をともなった U1-IV の潰瘍で肉芽腫は認められなかった(図 6)。潰瘍近傍に閉塞性静脈炎の所見が認められ、動脈には内膜の肥厚があり、内弾性板には巨細胞の浸潤がみとめられた(図 7)。

図6 組織所見(HE染色):腸管壁全体に密に慢性炎症細胞浸潤がみとめられる。



図7 組織所見(HE染色):動脈の内弾性板に浸潤した巨細胞。



術後の経過良好で顔面の皮疹も半年後には治癒した。

考 察

回盲部は、潰瘍の好発部位であるが、臨床症状や潰瘍の形態学的所見のみではその鑑別診断は必ずしも容易ではない^{1)~3)}。本症例の主病変である回盲部潰瘍は、腸間膜対側で、ほぼ円形で打ち抜き様形態を示し、渡辺や小西らのいう^{4)~6)}単純性潰瘍の特徴に酷似しているが、彼らが同時に指摘するようにB病における回盲部単純性潰瘍との鑑別は困難である。一方、Crohn病

や結核性潰瘍とは形態を異にし、組織学的ならびに細菌学的検査からも否定された。われわれは、本症例の病状最盛期に、B病の主たる症状の一つである皮膚病変の出現があったことを重視し、厚生省特定疾患の診断基準にもとずいて、B病の「可能性のあるタイプ」と考えた。B病の回盲部潰瘍は比較的良好にみられる。しかし、食道潰瘍を合併した同疾患の報告は少なく27例にすぎない^{7)~22)}。さらに食道と回盲部に潰瘍を同時に合併した症例は9例のみであった。B病に合併する食道病変は、矢島らによって食道炎型、潰瘍形成型、混合型に分類されている²⁴⁾。本例は混合型であった。食道潰瘍に血管炎の所見や肉芽腫をみとめることはまれで¹⁶⁾、本例でも好中球とリンパ球の浸潤を伴った非特異性の潰瘍の所見を呈するにすぎなかった。治療はステロイド剤、制酸剤あるいは手術でなされるが自然緩解の報告もある²¹⁾²³⁾。報告が少ないためにいまだ統一された治療方針はないようである。本症例の食道潰瘍は、回盲部切除約2週間後に自然に治癒したことより、回盲部の潰瘍とは性質を異にした随伴性の病変である可能性も考えられる。

おわりに

食道にも潰瘍を合併した腸型 Behçet 病の 1 例に、若干の文献的考察を加えて報告した。

本論文の要旨は第41回日本大腸肛門病学会総会で報告した。

文 献

- 1) 徳留一博, 政信太郎, 西俣寛人ほか: 回盲部の非特異性潰瘍の1例. 胃と腸 14: 769-772, 1979
- 2) 篠原 央, 宇都宮利善, 鈴木紘一ほか: 回盲部病変の診断. 医療 35: 888-893, 1981
- 3) 喜納 勇: 特集=Crohn病とその辺縁疾患, 鑑別の問題点. 臨外 34: 1099-1109, 1979
- 4) 渡辺 勇, 岡田 基, 桑原紀之ほか: 腸管型 Behçet病といわゆる Simpl Ulcer. 病理と臨 2: 233-244, 1984
- 5) 小西隆蔵, 勝見百治, 河野暢之ほか: 回盲部巨大腫瘍の1症例. 日本大腸肛門病会誌 36: 541-546, 1983
- 6) 渡辺 勇, 桑原紀之, 福田芳郎: 腸管型 Behçet病の病理組織学的研究. 胃と腸 14: 903-913, 1979
- 7) Brodie TE, Ochsner JL: Behçet's syndrome with ulcerative esophagitis: Report of the first case. Thorax 28: 637-640, 1973
- 8) Parkin JV, Wight DGD: Behçet's disease and the alimentary tract. Postgrad Med J 51: 260-264, 1975
- 9) Kikuchi K, Suga T, Nomiyam T et al: Eso-

- phageal ulceration in a patient with Behçet's syndrome. *Tokai J Exp Clin Med* 7 : 135-143, 1982
- 10) Yashiro K, nagasako K, hasegawa K et al : Esophageal lesions in intestinal Behçet's disease. *Endoscopy* 18 : 57-60, 1986
 - 11) Mori S, Yoshihira A, Kawamura H et al : Esophageal involvement in Behçet's disease. *Am J Gastroenterol* 78 : 548-553, 1983
 - 12) Lebowitz O, Forde KA, Berdon WE et al : Ulcerative esophagitis and colitis in a pediatric patient with Behçet's syndrome. *Am J Gastroenterol* 68 : 550-555, 1977
 - 13) Lockhart JM, McIntyre W, Caperton EM : Esophageal ulceration in Behçet's syndrome. *Ann Int Med* 84 : 572-573, 1976
 - 14) Levack B, Hanson D : Behçet's disease of the esophagus. *J Laryngol Otol* 93 : 99-101, 1979
 - 15) 安田幸彦, 鷺淵雅男, 菊地 茂ほか : 食道潰瘍を伴った Behçet 症候群の 1 例. *臨放線* 27 : 655-658, 1982
 - 16) 三宅 周, 岩野英二, 佐々木俊輔ほか : 食道潰瘍を合併したベーチェット病の 1 例. *Gastroenterol Endosc* 28 : 2047-2050, 1986
 - 17) 武田文和, 大山泰雄 : Behçet 症候群の 1 剖検例. *医のあゆみ* 41 : 60-61, 1962
 - 18) 菊池一博, 瀬上一誠, 渡辺浩之ほか : 食道潰瘍例の検討. *Prog Dig Endosc* 17 : 75-79, 1980
 - 19) 山筋 忠, 政野太郎, 橋本修治ほか : Behçet 病にみられた食道, 回腸終末部潰瘍と X 線像. *臨放線* 26 : 517-520, 1981
 - 20) 矢島通夫, 大友 晋, 小田島理恵子ほか : 食道ベーチェットと思われる 1 例. *Prog Dig Endosc* 20 : 188-190, 1982
 - 21) Shapiro LS, Notis WM, Romanpff NR : Self-limited esophageal ulcerations in Behçet's syndrome. *Arthritis Rheum* 26 : 690-691, 1983
 - 22) 浜中捷彦, 小峯征正, 瀬底正彦ほか : 食道潰瘍を合併した Behçet 症候群の 1 例. *Prog Dig Endosc* 4 : 48-51, 1974
 - 23) 高 楓, 浜田建男, 長尾和治ほか : 腸病変を合併した Behçet 病の 2 例. *日臨外医学会誌* 46 : 1006-1012, 1985